

カトマンドゥ盆地の ナーマサンギーティ文殊について

山口しのぶ

1. インドにおける文殊菩薩の姿

インド仏教において文殊菩薩は、日本におけると同様に観音と並んで人気の高い菩薩である。文殊は後漢の支婁迦讖訳『道行般若経』においては、観音や弥勒とともに菩薩たちの首長として登場する。また『文殊師利般涅槃経』においては、シュラヴァステーのバラモン出身の文殊が出家し、500人の仙人のために教説を説く¹⁾。

初期大乘経典において文殊が特に活躍するのは、『維摩経』および『華嚴経』である。『維摩経』において文殊は、病気になった維摩居士のもとを訪れ般若空の具体的な姿について対論する。また『華嚴経』「入法界品」では、文殊は善財童子にさどりの智恵について賢者に尋ねる旅を勧める役割を担っている。このような大乘経典にあらわれる文殊は、観音や弥勒と同様諸々の菩薩たちのリーダー的な存在であり、また知恵者であり、かつさどりの智恵を得させるためのアドバイスを行う役目を負っている。このように仏教諸尊の中でも重要な地位を占める文殊であるが、これらの経典においては文殊の具体的な尊容、持物等が詳しく描写されることは少ない²⁾。

密教の時代となり、文殊がますます多くの経典に登場するようになると、経典にはその具体的な姿が記述されるようになった。頼富本宏氏は、漢訳密教経典および後期密教におけるサンスクリットの観想法テキスト『サーダナ・マーラー』*Sādhnamālā* に登場する文殊の図像的特徴について整理しており、それによれば漢訳経典では、(1)童子形、(2)金色系統の体色、(3)青蓮華、経典、刀剣、与願印、説法印などの持物や印相などの特徴がある。

(2)

また『サーダナ・マーラー』においてはマンジュシュリー Mañjuśrī、アラパチャナ Arapacana、ダルマダートゥヴァーギーシュヴァラ Dharmadhātuvāgīśvara (法界語自在文殊) など 14 種の文殊の記述が見られる。そこにおいては体色も、白、黄金、赤等など多様であり、面や臂の数も多い文殊が登場する。また持物や印相は漢訳經典にも見られた刀剣、經典、青蓮華(睡蓮)、蓮華上の刀剣や經典、与願印、說法印、禪定印などを臂数に応じて組み合わせる場合が多い³⁾。

以上のような文殊が実際の作例として知られるのは、エローラ石窟の八大菩薩中の文殊であり、パーラ朝になって文殊の造像活動が本格化したとされる⁴⁾。パーラ朝の文殊の作例については、すでに頼富本宏氏、下泉全暁氏、森雅秀氏により詳細な研究がなされている⁵⁾。これらの研究において、パーラ朝の文殊の図像の多くが『サーダナ・マーラー』などの文献に忠実な図像的特徴を持つことが明らかになっている。

このような先行研究を踏まえ、本稿においては現代のネパールやチベットでも人気の高い文殊の一種ナーマサンギーティ Nāmasaṅgīti を取り上げ、特にカトマンドゥ盆地の作例を中心に、その図像的特徴を見ていきたい。

2. カトマンドゥ盆地のナーマサンギーティ文殊

2.1 カトマンドゥ盆地における文殊

ネパール、カトマンドゥ盆地では、チベット・ビルマ語系のネワール語を話すネワール人たちの間にネワール仏教が広まっている。この仏教はチベット仏教と同様インド密教の伝統を受け継いでいるが、ネワール仏教における文殊の聖性は非常に高い。ネパールで成立した『スワヤンブー・プラーナ』には、カトマンドゥ盆地と文殊に関わる話が含まれている。

本初仏 (ādibuddha) がある時カーリーフラダ湖の蓮華の上に火炎の姿で現れた。中国からネパールを訪れた文殊は 2 人の妃およびダルマカラ王とともに本初仏に会いに来たが、水に阻まれて近づけず、文殊が湖の周囲を回って南側を剣で切り取り、水を外に流した。そこは盆地となり、文殊はそこに寺院を建てた⁶⁾。この伝説において文殊は中国から

ネパールに文明をもたらす存在であり、また湖だったカトマンドゥ盆地を人々が住める状態にした国づくりの担い手である。

このようにカトマンドゥ盆地の作り手ともされる文殊の図像は、この盆地内のさまざまな場所で目にすることができる⁷⁾。ネワール仏教で信仰される文殊は、いくつかの異なった姿をとる。一面二臂の文殊像は結跏趺坐で坐し、右手で剣を振り上げ、左手で悟りの智恵を象徴する般若経典を持つ。また右手の剣、左手の経典の下に睡蓮を置くこともある。一面四臂の文殊の場合には、上記の剣と般若経典に加え、今一つの右手で矢を、左手で弓を持つことが多い。

カトマンドゥ盆地で最もよく知られるマンダラに「法界語自在マンダラ」(dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍala)があり、このマンダラの中尊が法界語自在文殊である。この文殊は大日如来の化身とも言われ、ネワール仏教の総本山スワヤンブーナート寺院の中心の仏塔に住していると考えられている⁸⁾。この文殊は四面六臂、八臂ないし十臂で結跏趺坐し、一對の両手で転法輪印を結び、他の右手で剣、矢、金剛杵を持ったり、与願印を結び、左手で睡蓮、弓、金剛鈴などを持ち、しばしば妃を抱いた姿であらわされる。

この法界語自在文殊は先に述べた『サーダナ・マラー』や、11～12世紀インド、ナーランダーのヴィクラマシラー僧院の学頭アパヤカラグプタによって著されたマンダラのテキスト『完成せるヨーガの環』*Niṣpannayogāvalī*にも述べられており、カトマンドゥ盆地のこの文殊の尊容はこれらのテキストの記述と一致するものが多い。

このような文殊に加えて、カトマンドゥ盆地では「ナーマサンギーティ」(nāmasaṃgīti)と呼ばれる文殊がよく知られている。この文殊はネワール仏教パンテオンにおいては非常に高い地位を占めている。次節において、このナーマサンギーティの図像について詳しく述べていこう。

2.2 ナーマサンギーティ文殊の作例

前述のようにカトマンドゥ盆地では「ナーマサンギーティ」と呼ばれる文殊菩薩の人気の高いが、この文殊は通常一面十二臂で、一對の両手を頭上に持ち上げ合掌する姿が特徴的である。ナーマサンギーティは文殊の名号を読誦することにより得られる功德を中心的に述べた密教経典

(4)

の名称でもある。経典としての『ナーマサンギーティ』（『聖文殊真實名義經』大正藏 No.1187）は『金剛頂經』の發展系列にあり、中期密教ヨーガ・タントラの發展の最後に位置すると考えられる⁹⁾。

後期の無上ヨーガ・タントラ経典である『時輪タントラ』*Kālacakratāntra* の中でこの『ナーマサンギーティ』の重要性が説かれており、チベット語にも早期に翻訳されている¹⁰⁾。またネパールにはこの経典のサンスクリット写本がきわめて多数存在する一方、中国や日本の仏教には、ほとんど知られることはなかった。この経典では菩薩である文殊が法身である大毘盧遮那に相当する存在とみなされているが¹¹⁾、先に述べたようなナーマサンギーティ文殊の具体的な姿が記述されていない。

また『サーダナ・マラー』No.82 には「ナーマサンギーティ成就法」(*nāmasaṃgītisādhana*) が述べられているが¹²⁾、そこにおいてはこの文殊は三面四臂であり、その四臂のそれぞれで般若経典、劍、弓、矢を持つとされカトマンドウ盆地でよく知られるナーマサンギーティとは姿を異にしている。

19世紀のアムリタ・アーナンダにより著された『ダルマコーシャ・サングラハ』*Dharmakośasaṃgraha* はネワール仏教の代表的な寺院や仏教パントオンの諸尊の姿を述べているが、ナーマサンギーティについては以下のように記されている¹³⁾。

一面で白色であり、瞑想している（半眼の）眼つきで、微笑んでおり、髪髻冠を結っている。さまざまな装飾品で飾られ、6つの印 (*mudrā*) により飾られている。十二臂を持ち、第1の左右の臂により胸の所で施無畏印を結ぶ。第2の二臂で宝冠の上で合掌している。第3の右手で棒が付いた二重金剛の上に載る劍を持ち、第4の両手で「タルバナ印」（腕を肩の高さに持ち上げ、掌を内側に向け指先は少し曲げて肩を指さす形）¹⁴⁾を結ぶ。第5の右手と左手では容器に入った甘露を救い上げる仕草 (*utkṣepaṇamudrā*) をしている。第6の右手と左手では鉢を持って禪定印を結んでいる。第3の左手では金剛杵の付いたカトヴァーンガ杖を持ち、蓮華の上に金剛結跏趺坐で坐す。これがナーマサンギーティと呼ばれる仏、世尊であり、

空という形相を持つ虚空で光り輝く。

また先行研究においてもネパールのナーマサンギーティの図像が紹介されている。(Bhattacharya 1968b: 276) のネパールのものとして紹介されているナーマサンギーティ像は一面十二臂、胸前の両手で施無畏印を結び、頭上において一対の手で合掌する。印刷が非常に不鮮明であるが、第3の右手では剣、左手では経典を持つように見える。また第4の両手とも人差し指と親指で輪を作っている。第5の両手は容器に差し込まれており、第6の両手は容器を持つ手で定印を結んでいる。

von Schroder (1981: 94) も14世紀のネパールの作例を示している。一面十二臂、施無畏印と合掌および第5、第6の図像的特徴は前作例と同様であるが、第3、第4の両手には持物を持たず肩の高さまで持ち上げる。これらの手がもともと何も持たなかったのか、あるいは持物が欠損しているのかは不明である。また (Getty 1975: Plate XX) の作例も (von Schroder 1981: 94) の作例と同様の図像的特徴を持つ。

(Krejiger 1999: 82) には1830年に製作された、仏頂尊勝の寺院を中心とし周囲に数多くの諸尊を配置した絵画があり、その右上の部分にナーマサンギーティ像が見える。この像の体色は赤色で一面十二臂であり、胸前において一対の手で転法輪印を結び、頭上で合掌、第3の右手で睡蓮(あるいは蓮華)の上に置かれた剣を、左手で睡蓮(あるいは蓮華)の上に置かれた経典を持つ。第5の両手を容器に差し入れ、第6の両手では容器を持って定印を結ぶ。一方第4の臂は前作例のどれとも一致せず、膝の高さまで両手を下げて与願印を結んでいる。以上のように先行研究で示されているナーマサンギーティの作例は、一面十二臂、合掌、容器に差し入れる手、容器を持つ手で定印を結ぶ点は共通しているが、持物その他でバリエーションが見られる。

筆者は、2007年8月17日より27日までカトマンドゥ盆地において図像資料収集を行った。その際盆地内で得られたナーマサンギーティの作例をここに紹介していこう。

<作例1> カトマンドゥ国立博物館所蔵の像(1)(所蔵No.254, 写真1)

石板上に浮き彫りされたナーマサンギーティ像である。結跏趺坐し、

(6)

宝冠を被り、装飾品をつけた菩薩の姿をとる。一面十二臂で、眼は半眼である。一対の手で胸前において施無畏印を結ぶ。他の一対の手は頭上で合掌し、第3の右手で蓮華の上の二重金剛、左手で蓮華の上に仏塔状のものを持つ。第4の右手は何も持たず掌を表に向け、親指と人差し指で輪を作り、左手では数珠を持つ。第5の2臂で鉢の形の容器に触れる仕草をし、第6の両手で容器を持って定印を結ぶ。

<作例2> カトマンドウ国立博物館所蔵の像(2)(所蔵 No.184, 写真2)

単独のブロンズ像であり、身体は金メッキがなされている。蓮華座に結跏趺坐し、宝冠や装飾品にはトルコ石、ガーネットなどが埋め込まれた菩薩の姿である。一面十二臂、胸前で一対の手で印を結ぶが、ここでは前作例と異なり両掌をこちらに向け、それぞれの手の親指と人差し指で輪を作っている。第2の両手は頭上で合掌し、組んだ両手の中指の先端を付け、また人差し指の先端を近づけている。第3の左右の手には杖状の持物があったことが予測されるが、ここでは両手とも持物は欠損している。第4の両手には何も持たず肩まで持ち上げ、全部の指をやや折り曲げた格好をしている(タルパナ印と思われる)。第5の両手で容器の中に入った宝珠のようなものに触れ、第6の両手で容器を持ちながら定印を結ぶ。

<作例3> カトマンドウ国立博物館所蔵の像(3)(所蔵 No.027-24-21, 写真3)

金メッキされた単独のブロンズ像である。胸前で一対の両手で施無畏印を結ぶ。頭上で合掌する手は両手中指を合わせ、さらに両人差し指を近づけている。第3の両手には何も持たないが、作例2が両手指すべてを丸く曲げ杖状のものを持っていたと想像できる形をとるのに比べ、この作例では右手は右肩横で軽く指を広げ、左手は中指と親指先をつけて輪を作っており、この両手が何かを持っていたとは考えにくい形をしている。第4の両手は第3の両手と同様肩まで持ち上げ、指全部を軽く折り曲げており、持物はない(タルパナ印と思われる)。第5の両手を容器の中に差し入れ、中のものをすくい上げる仕草をしている。第6の両手で容器を持ちながら定印を結ぶ。

<作例4> カトマンドウ、ジャナ・バハの像（写真4）

カトマンドウ市内の観音を本尊とする寺院ジャナ・バハ Jana Baha において、本堂と向かい合う形で建てられた祠にある石像である。三尊形式であり、ナーマサンギーティ像を中心として、右側にヴァスダラー（持世）、左側にターラーという2尊の女神を配している。中央のナーマサンギーティ像は、胸前において二臂で合掌する手をやや開き気味にしたポーズをとる。頭上では、伸ばした人差し指のみをつけた両手で合掌している。第3の右手で剣、左手で経典を持ち、第4の右手で矢、左手で弓を持つ。第5は前作例と同様容器に指を差し入れ、第6の両手は容器を持つ手で定印を結ぶ。

<作例5> カトマンドウ、タン・バヒ、トーラナの像（写真5）

カトマンドウ、タメル地区の寺院タン・バヒ Thap Bahi 本堂トーラナ中央の像である。このナーマサンギーティ像の左右には、それぞれ観音像と文殊像が配されている。中央のナーマサンギーティ像は前作例と同様十二臂、胸前では一対の二臂で施無畏印を結ぶ。頭上では、一対の手で各々の中指先をつけて合掌し、第3の右手で下から蓮華、宝珠、二重金剛を積み重ねた上に剣を付けた杖を持ち、左手は下から蓮華、宝珠、経典の上の金剛杵が付いた杖を持つ。第4の両手は各々人差し指と親指で輪を作るポーズをとる。第5、第6は今までの作例と同様であるが、甘露の容器の中には宝珠のようなものが入っている。

<作例6> カトマンドウ、スワヤンブー博物館所蔵の像（写真6）¹⁵⁾

16世紀に制作されたブロンズ像である。十二臂で胸前の一対の両手で施無畏印を結ぶ。頭上で中指をつけ合掌し、第3の右手で作例5のタン・バヒの像と同様、蓮華、宝珠、二重金剛上の剣の付いた杖を持ち、左手には蓮華、宝珠、三叉戟上の金剛杵の付いた杖を持つ。第4の2臂は肩まで持ち上げ、親指と薬指で輪を作る。第5、第6臂は前作例と同様である。

<作例7> パタン博物館所蔵の像（写真7）

15ないし16世紀制作のブロンズ像で、金メッキが施されており、ま

(8)

た宝冠、腕輪等にトルコ石がはめ込まれている。一面十二臂であり、胸前で両掌を表に向け各々の親指と人差し指で輪を作る。パタン博物館の展示説明では、この印は「ヴィタルカ印」(vitarkamudrā, 説法印)と呼ばれている。頭上で両中指を付け、両手の各々の薬指と小指を絡めている。第3の右手の持物は欠損していると思われる。左手は金剛杵の付いた杖を持つ。第4の両手は肩まで持ち上げ左右で小さく掌を開く(タルパナ印と思われる)。第5、第6の手は今までの作例と同様である。

<作例8> パタン、ナ・バハの像(写真8)

パタン市、ナ・バハ寺院境内の小堂に安置された単独の石像である。十二臂のうちの一対の臂で胸前において転法輪印を結び、頭上ではすべての両指をつけて合掌する。第3の右手で剣の付いた杖を、左手で經典の付いた杖を持つ。第4の右手には矢、左手に弓を持つ。第5、第6の臂は前作例と同様である。

<作例9> パタン、ブ・バハの像

十臂であり、胸前で転法輪印を結ぶ。頭上では2臂の両中指を立てて合掌する。他の2臂の左右で杖を持つが、杖の先が欠損しているために何が杖先に付いていたかは明らかではない。第4の二臂で容器に手を差し込み、第5の二臂で容器を持ちながら定印を結ぶ。この像は十臂のみであるが、像を安置した小堂の上部にあるトーラナのナーマサンギーティ像は十二臂であり、堂内の像には無い二臂で矢と弓を持つことから、堂内の像も元来は十二臂で矢と弓を持つ両手が欠損している可能性がある。

<作例10> ブンガマティ、ラト・マツェンドラナート寺院トーラナの像(1)(写真9)

カトマンドゥ市の南部ブンガマティ村にあるラト・マツェンドラナート(赤観自在)寺院の本堂四方のトーラナの2つにナーマサンギーティ像が彫刻されている。両者とも最近の作と見られる。一体目のナーマサンギーティ像は、体色は白色で一面十二臂、二対の臂のうち、一対は胸前、今一対は頭上で合掌する。第3の右手は数珠、左手は經典を持ち、

第4の左手は三叉戟を持つが、右手の持物は不明である。第5の右手は輪、左手は蓮華を持ち、第6の二臂は定印を結ぶが、容器は持たない。またこの作例の右側には白色の文殊像、左側には赤色の文殊像がある。

<例11> ブンガマティ、ラト・マツェーンドラナート寺院トーラナの像(2) (写真10)

いままでの全作例と異なり、一面十臂である。一対の手で胸前、今一対の手は頭上で合掌する。第3の右手は欠損のため持物があったかどうか明らかでない。左手では経典を持つ。第4の右手で輪を持つが、左手は持物が欠損している。第5の右手は施無畏印を結び、左手には何らかの持物を持っているが、内容は不明である。また今までの作例に見られた定印を結ぶ手は見られない。

<作例12> シャンク、カドガ・ヨーギニー寺院トーラナの像(写真11)

カトマンドゥ市の北東約15キロメートルにあるシャンクのカドカ・ヨーギニー女神寺院の本堂トーラナにあるナーマサンギーティ像である。一面十二臂、胸前の一対の臂で水瓶あるいは仏塔と思われるような容器を持つ。一対の臂を頭上に持ち上げ合掌はせず、両掌を外側に向けている。第3の右手で剣を、左手で経典を持つ。第4の右手は数珠を、左手は花の茎のようなものを持つが先が欠損しているため正確な持物は不明である。

第5の右手は与願印を、左手は施無畏印を結び、第6の臂は鉢状の容器を持ちながら定印を結ぶ。いままで述べてきた作例がすべて持物を持たず胸前で印を結ぶか合掌するのに比べ、この作例のみが容器を掲げ持つ。また第5の両手でそれぞれ与願印、施無畏印を結ぶ点がいままでの作例と異なった本作例の特徴である。

3. 結び

以上、カトマンドゥ盆地で見られるナーマサンギーティ像の作例を見てきたが、これらの尊像の図像的特徴をまとめると表1のようになる。

作 例	面・臂	胸前の一対の臂	頭上の一対の臂
1. カトマンドゥ国立博物館 (1)	1 面 12 臂	施無畏印	指を立てずに合掌
2. カトマンドゥ国立博物館 (2)	1 面 12 臂	親指と人差し指で輪 (ヴィタルカ印)	中指を付けて合掌
3. カトマンドゥ国立博物館 (3)	1 面 12 臂	施無畏印	中指を付け、人差し指を近づけて合掌
4. ジャナ・バハ	1 面 12 臂	合掌した両手を開く	人差し指をつけて合掌
5. タン・バヒ	1 面 12 臂	施無畏印	中指を付けて合掌
6. スワヤンブー博物館	1 面 12 臂	施無畏印	中指を付けて合掌
7. バタン博物館	1 面 12 臂	親指と人差し指で輪 (ヴィタルカ印)	中指を付けて合掌
8. バタン、ナ・バハ	1 面 12 臂	転法輪印	すべての指を付けて合掌
9. バタン、ブ・バハ	1 面 12 臂または 1 面 10 臂	転法輪印	中指を立てて合掌
10. プンガマティ ラト・マツェンドラナート (1)	1 面 12 臂	合掌	すべての指を付けて合掌
11. プンガマティ ラト・マツェンドラナート (2)	1 面 10 臂	合掌	すべての指を付けて合掌
12. シャンク、 カドガ・ヨーギニー寺院	1 面 12 臂	両手で水瓶あるいは 仏塔を持つ	両掌を外側に向ける

表1 カトマンドゥ盆地におけるナーマサンギーティ像の図像的特徴

第3の臂	第4の臂	第5の臂	第6の臂
(右) 蓮華の上の二重金剛	(右) 人差し指と親指を付ける	容器に触れる	容器を持ち定印
(左) 蓮華の上に仏塔状のもの	(左) 数珠		
(右) 持物は欠損	(両) 掌を表に向け、指をやや折り曲げる(タルパナ印)	(両) 容器に入った宝珠状のようなものに触れる	容器を持ち定印
(左) 持物は欠損			
(両) 中指と親指を付けて輪を作る	(両) 指を軽く折り曲げる(タルパナ印)	(両) 容器の中に手を差し入れる	容器を持ち定印
(右) 剣	(右) 矢	(両) 容器の中に手を差し入れる	容器を持ち定印
(左) 経典	(左) 弓		
(右) 蓮華、宝珠、二重金剛上に剣の杖	(両) 人差し指と親指で輪をつくる	(両) 容器の中に手を差し入れる	容器を持ち定印
(左) 蓮華、宝珠、経典上に金剛杵の杖			
(右) 蓮華、宝珠、二重金剛上に剣の杖	(両) 親指と薬指で輪をつくる	(両) 容器の中に手を差し入れる	容器を持ち定印
(左) 蓮華、宝珠、三叉戟上に金剛杵の杖			
(右) 持物なし	(両) 左右の掌を小さく開き、指を折り曲げる(タルパナ印)	(両) 容器の中に手を差し入れる	容器を持ち定印
(左) 金剛杵のついた杖			
(右) 剣のついた杖	(右) 矢	(両) 容器の中に手を差し入れる	容器を持ち定印
(左) 経典のついた杖	(左) 弓		
(右) 杖(先は破損)	すべて破損の可能性	(両) 容器の中に手を差し入れる	容器を持ち定印
(左) 杖(先は破損)			
(右) 数珠	(右) 不明	(右) 輪	容器を持たず定印
(左) 経典	(左) 三叉戟	(左) 蓮華	
(右) 欠損	(右) 輪	(右) 施無畏印	無し
(左) 経典	(左) 持物は欠損	(左) 持物は不明	
(右) 剣	(右) 数珠	(右) 与願印	容器を持ち定印
(左) 経典	(左) 先が破損のため不明	(左) 施無畏印	

これまで見てきたカトマンドゥ盆地におけるナーマサンギーティ像は、1例（作例9を十臂とみれば2例）を除きすべて一面十二臂である。しかしながら胸前の一对の臂の格好は、施無畏印、合掌、親指と人差し指で輪を作る（ヴィタルカ）印、転法輪印などを結ぶ場合、または水瓶あるいは仏塔を持つ姿という、いくつかのパリエーションがある。また頭上の一对の臂に関しては、一例を除き合掌している。

第3の一对の臂に関しては、剣と経典を持つ作例が多く、その他数珠や蓮華、金剛杵などの例がある。また第4の臂に関しては、持物を持たず2本の指で輪を作ったり、肩の高さで指を広げたりするしぐさ（タルパナ印と思われる）のほか、弓と矢を持つ例が複数見られる。現在カトマンドゥ盆地で見られる経典『ナーマサンギーティ』の版本表紙に印刷されたナーマサンギーティ像の絵や寺院に貼られたポスターの像（写真12⁶⁾）は、第四臂右手で矢、左手で弓を持つ姿で描かれることがほとんどであり、この弓と矢は現在ナーマサンギーティ像の持物としてネワール仏教徒たちに一般的に受け入れられていると思われる。

第5の臂に関しては、ブンガマティの2例およびシャンクの1例をのぞいて、鉢状の容器に手を差し入れる、あるいは容器に触れるしぐさで示されることが多い。また第6の臂に関しては、鉢状の容器を持ちながら定印を結ぶ形がほとんどである。

一方『ダルマコーシャ・サングラハ』に述べられるナーマサンギーティは、胸前で施無畏印を結び、頭上で合掌する。第3の右手で剣、左手で金剛杵のついた杖を持ち、第四臂はタルパナ印を結ぶ。また第五臂は容器の甘露をすくい上げ、第六臂は容器を持ち定印を結ぶ。この記述と以上に述べた作例を比較すると、胸前の印では12例中5例が一致し、頭上の臂では11例が一致する。しかしながら第3臂の剣は5例と一致するものの、金剛杵のついた杖に関してはわずか1例と一致するのみであり、その代わりに経典を持つ例が多い。第4臂に関しては、『ダルマコーシャ・サングラハ』には「タルパナ印を結ぶ」とあるが、本稿の作例にはタルパナ印と見られるものが3例あったほか、人差し指あるいは薬指と親指で輪を作る例や、右手で矢、左手で弓を持つ例が見られる。第5臂、第6臂に関しては『ダルマコーシャ・サングラハ』の記述に一致する作例が多い。

カトマンドゥ盆地ではナーマサンギーティは文殊の一種として認識されていると考えられ先行研究においても文殊として紹介されているが¹⁷⁾、Bhattacharya (1968b: 206)はこの十二臂のナーマサンギーティは同書 pp.115-116 に述べたナーマサンギーティ文殊とは区別されるべきであり¹⁸⁾、十二臂のナーマサンギーティは経典『ナーマサンギーティ』が神格化されたものであると述べている。また同書では「『ダルマコーシャ・サングラハ』にはナーマサンギーティ尊の族長は言及されていないが、体色が白であるため、大日如来である」とも述べられている¹⁹⁾。また Getty (1975: 66)は、「ナーマサンギーティは観音の一種である」と述べている²⁰⁾。一方、ネワール仏教の僧侶であるガウタム・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ氏は、ナーマサンギーティは五仏すなわち大日如来、阿閼如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来の五如来を統合した存在であると述べている²¹⁾。

これらの諸見解によれば、カトマンドゥ盆地において十二臂のナーマサンギーティは文殊の一種と考えられるほか、大日如来から派生した仏、観音の一種と見る場合、あるいは五仏の統合すなわち一種の本初仏 (ādibuddha) 的性格を持つとする考え方など複数の異なった性格を帯びていると考えられる。このことからカトマンドゥ盆地において、ナーマサンギーティは以前より単に文殊の一種とのみ考えられるというよりも、上記のようないくつもの異なった性格を持っており、それら異なった性格を意識した上で印相や持物などの異なったナーマサンギーティ像が制作されてきたのではないかと推測される。例えば作例8および9のように転法輪印を結んでいる像は、大日如来から派生した仏としての性格を示しており²²⁾、また作例10のように数珠や蓮華を持つ像は観音を意識しているとも考えられる。さらに作例12のように、第五臂で与願印と施無畏印を結ぶ像は、定印を結ぶ第六臂と合わせて五仏を統合した性格を示すという可能性もある。

先にも述べたように現在カトマンドゥ盆地で経典『ナーマサンギーティ』の版本表紙や、ナーマサンギーティ読誦会のポスター等に描かれる像は、第三臂で剣と経典、第四臂で弓と矢を持つ姿で表される場合がほとんどである。剣と経典、弓と矢というこれら4つの持物は文殊の持物として一般的であり、『サーダナ・マーラー』に述べられるナーマサン

ギーティ文殊も四臂のそれぞれにこれらの持物を持つ。すなわちこの剣と経典、弓と矢を併せ持つナーマサンギーティ像は文殊としての性格を強く持っている。このことから元来幾つかの異なった性格を持つナーマサンギーティは、少なくとも現在のカトマンドゥ盆地では文殊としての性格を一番強く持つと意識されていることは確かである。

次に考察しなければならないのは、この十二臂の像がなぜ、またいつ頃から「ナーマサンギーティ」と呼称されてきたのか、また本初仏的な性格を持つナーマサンギーティが、なぜ、また誰に対して合掌をしているのかなどの点であるが、これらに関しては今後の課題としたい。

[附記] 本稿は2007年12月21日に脱稿したが、2007年12月16日に大阪市の法楽寺で開催された密教図像学会第27回学術大会において、スタン・シャキヤ氏(種智院大学非常勤講師)が『『ナーマサンギーティ文殊』の図像と典拠についての一考察』と題する研究発表をされた。しかしながら、筆者はこの学会に出席できず氏の発表を聞くことができなかったことが残念であった。

注

- 1) (菅沼 1986: 102-103)
- 2) (頼富 1985: 322) (下松 1994: 52)
- 3) (頼富 1985)
- 4) (森 1996: 55)。なお宮治(1985: 12,21)はガンダーラ出土の半跏思惟、梵夾を持つ菩薩が文殊である可能性を述べている。
- 5) (頼富 1988) (頼富・下泉 1994) (森 1996)
- 6) (Bhattacharya 1968b: 101) (Getty 1978: 110-111)
- 7) カトマンドゥ盆地の文殊については(立川 2004: 80-86)に詳しい。
- 8) ネワール仏教の最も基本的な儀軌である『師曼荼羅供養儀軌』*Gurumaṇḍalapūjāvidhi* 表白文には「吉祥なるスワヤンブー仏塔に住する法界語自在文殊の近くにおいて」(*śrīsvayambhūcaityadharmadhātuvāgīśvarasannidhāne*)という部分がある(山口2005: 135)。
- 9) (立川 1989: 11)

- 10) (桜井 2005: 118)
- 11) (桜井 2005: 120)
- 12) (Bhattacharya 1968a: 159-161) なお (Kirfel 1959: 54) にも同様の図像的特徴を持つ尊格がナーマサンギーティ文殊として述べられている。
- 13) 以下の和訳は (Aryāl 2002: 265) を定本にした。なお (Bhattacharya 1968b: 207) にも *Dharmakośasaṃgraha* のサンスクリット文および英訳があるが、第3の右手の持物が後者では「杖が付いた」(sadaṇḍa) を欠いている。前者では第四臂の描写は右手のみ (savyacaturthena) となっており、本稿では (Bhattacharya 1968: 207) の記述 (savyavāmacaturthebhyām) を参照して両手の印相として和訳した。
- 14) (Gordon 1978: 22) および (Bunce 1997: 300) の説明によった。両文献において、この印は「ナーマサンギーティの印である」と述べられている。
- 15) 写真6のみは1994年8月筆者が撮影したものである。
- 16) 写真12は、2007年8月バタン市のナ・バハで開催された『ナーマサンギーティ』の読誦会のポスターである。
- 17) (立川 2004: 83)
- 18) また (Lokesh Chandra 2003: 2405-2406) においても、十二臂のナーマサンギーティは *Nāmasaṃgiti Vairocana* として紹介されており、「ナーマサンギーティ文殊とは区別されるべき」としている。一方同書では、ナーマサンギーティ文殊の説明として、『サーダナ・マーラー』第82番に述べられる三面四臂のナーマサンギーティを紹介している。
- 19) (Bhattacharya 1968b: 206)
- 20) Liebert (1976: 190) は観音の一種あるいは大日から派生した尊格とする。また Liebert も Lokesh Chandra と同様ナーマサンギーティ文殊を別尊としている。
- 21) 2007年8月筆者がカトマンドゥ盆地にて図像調査を行った際に得られた情報である。その際ガウタム・ラトナ氏は、(立川 2004: 83) に掲載されている、氏が描いたナーマサンギーティ像(胸前で転法輪印、頭上で合掌、第三臂で剣と経典、第四臂で矢と弓、第五臂で鉢に手を入れ、第六臂で鉢を持って定印を結ぶ像)を示しながら、胸前の右手が大日、左手が不空成就、第五臂が宝生と阿闍、第六臂が阿弥陀を表す、という説明をされた。
- 22) カトマンドゥ盆地の大日如来は転法輪印を結ぶ場合が多い。(立川 2004:

46) 参照。

参考文献

- 桜井 宗信 2005 「『ナーマサンギーティ』読経から瞑想へ」『インド後期密教』(上)、春秋社。
- 下松 徹 1994 「文殊菩薩—そのかたちと信仰—」『高野山大学密教文化研究所紀要』8: 49-93.
- 菅沼 晃 1986 「文殊菩薩とは」『大法輪』53-6: 100-106.
- 立川 武蔵 1989 「カトマンドゥにおける法界マンダラ」『法界語自在マンダラの神々』(長野泰彦・立川武蔵編『国立民族学博物館研究報告別冊』7号) 国立民族学博物館, pp.5-20.
2004 『曼荼羅の神々』 ありな書房。
- 宮治 昭 1985 『インド・パキスタンの仏教図像調査』 弘前大学。
- 森 雅秀 1996 「パーラ朝の文殊の図像学的特徴」『高野山大学論叢』31: 55-98.
- 山口しのぶ 2005 『ネパール密教儀礼の研究』 山喜房佛書林。
- 頼富 本宏 1985 「文献資料に見る文殊菩薩の図像表現」『雲井昭善博士古稀記念 仏教と異宗教』平楽寺書店。
1988 「パーラ朝期の文殊菩薩像」『佛教芸術』178: 105-120.
- 頼富 本宏・下泉 全暁 1994 『密教仏像図典』人文書院。
- Aryār, Mukundarāj (ed.) 2002 *Dharmakośa-saṃgraha*. Kathmandu: Nepal Rājakiya Prajñā Ptaṭiṣṭhān.
- Bhattacharya, B. 1968a *Sādhnamālā*, G.O.S. vol.26, Baroda: Oriental Institute Baroda.
1968b *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firm K.L. Mukhopadhyay.
- Bunce, Frederich W. 1997 *A Dictionary of Buddhist and Hindu Iconography*. New Dehli: D.K.Print World.
- Clark, W.E. 1965 *Two Lamaistic Pantheon*. New York: Paragon Book Reprint.
- Getty, Alice 1978 *The Gods of Northern Buddhism*. New Dehli: Munshiram Manoharlal Publishers.
- Gordon, A.K. 1978 *The Iconography of Tibetan Lamaism*. New Dehli: Munshiram

Manoharlal.

Kirfel, Willibald 1959 *Symbolik des Buddhismus*. Stuttgart: Hiersemann.

Kreijger, Hugo E. 1999 *Kathmandu Vally Painting*. London: Serindia Publications.

Liebert, Gösta 1976 *Iconographic Dictionary of the Indian Religions*. Leiden: E. J.Brill.

Lokesh Chandra 2003 *Dictionary of Buddhist Iconography*, vol.8. New Dehli: International Academy of Indian Culture.

von Schroeder, Ulrich 1981 *Indo-Tibetan bronzes*. Hong Kong: Dharma Publications.



写真2 カトマンドゥ国立博物館所蔵の像(2)



写真1 カトマンドゥ国立博物館所蔵の像(1)



写真4 カトマンドウ、ジャナ・バハの像



写真3 カトマンドウ国立博物館所蔵の像(3)

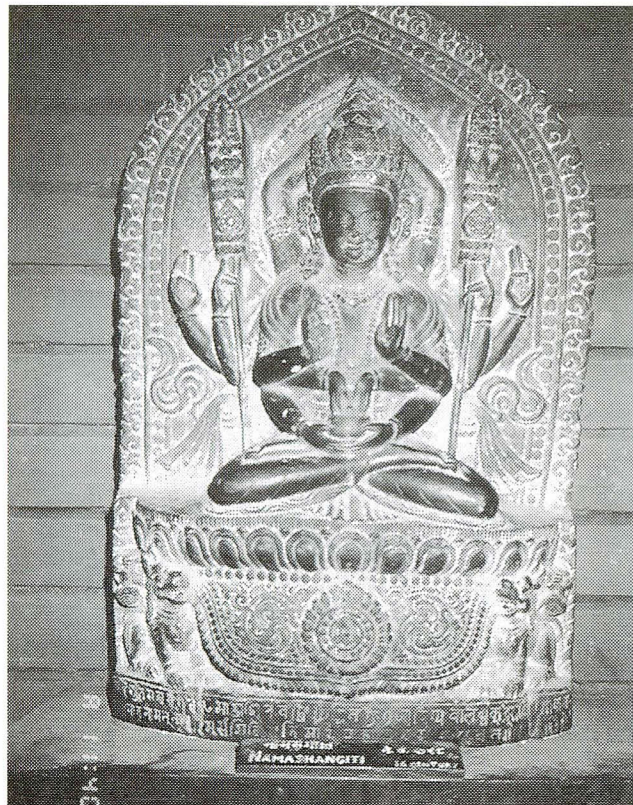


写真6 カトマンドウ、スワヤンブー博物館所蔵の像



写真5 カトマンドウ、タン・バヒ、トーラナの像



写真8 パタン、ナ・バハの像



写真7 パタン博物館所蔵の像

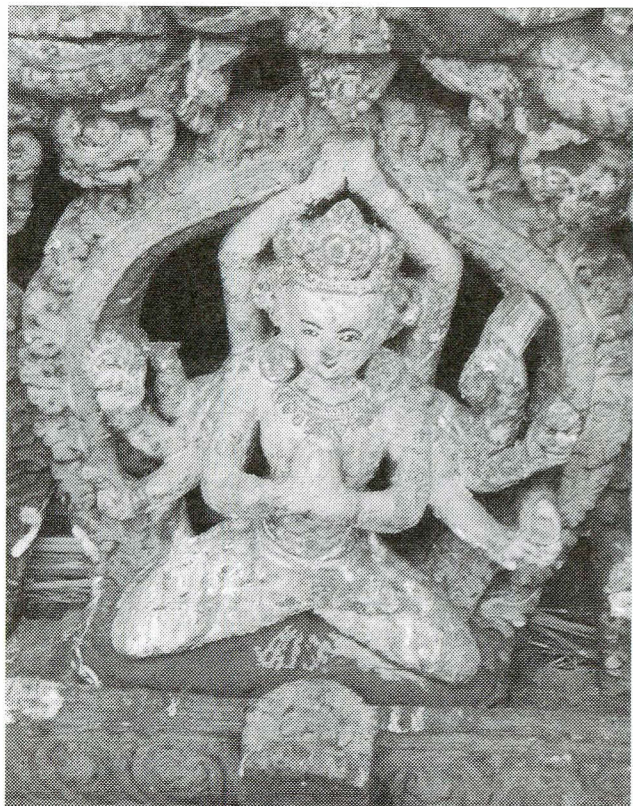


写真10 ブンガマティ、ラト・マツェンドラナート寺院トーラナの像(2)



写真9 ブンガマティ、ラト・マツェンドラナート寺院トーラナの像(1)

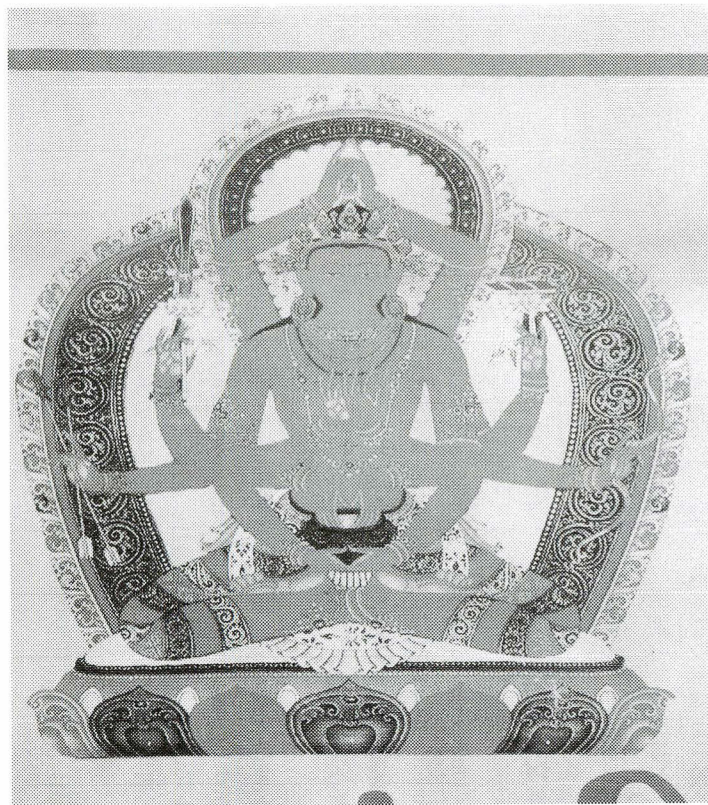


写真12 ナ・バハにおける経典『ナーマサンギーティ』読誦会ポスターの図像



写真11 シャンク、カドガ・ヨーギニー寺院トーラナの像